

『Global化に挑戦する大学』掲載：金沢大学副学長 柴田正良先生インタビュー記事

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Shibata, Masayoshi メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/46428

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.





金沢大学

KANAZAWA UNIVERSITY



大学
DATA

〒920-1192 石川県金沢市角間町
学生部入試課学生募集係
TEL. 076-264-5162
Http://www.kanazawa-u.ac.jp/

学 部	(3学域16学類制) 人間社会学域：人文学類／法学類／経済学類／学校教育学類／地域創造学類／国際学類 理工学域：数物科学類／物質化学類／機械工学類／電子情報学類／環境デザイン学類／自然システム学類 医薬保健学域：医学類／薬学類／創薬科学類／保健学類
大学院研究科	人間社会環境研究科／自然科学研究科／医薬保健学総合研究科／先進予防医学研究科／法務研究科／教職実践研究科
学生数	10,488人(2016年5月1日現在)



柴田正良副学長

「金沢大学ブランド」の人材育成を
目指して、5つの能力で構成される
「金沢大学＜グローバル＞スタンダード」
に基づくカリキュラム改革が進行。

新しい共通教育「GS科目群」がスタート

金沢大学では、学生が卒業までに身につけるべき能力を「金沢大学＜グローバル＞スタンダード(KUGS)」として掲げ、以下の5つの能力で表現し、人材育成の目標にしている。

- ①自己の立ち位置を知る
- ②自己を知り、自己を鍛える
- ③考え・価値観を表現する
- ④世界とつながる
- ⑤未来の課題に取り組む

「KUGSを単なる謳い文句に終わらせないために、カリキュラムに確実に反映させているところに特色があります。その一環として、

2016年度には、新しい共通教育『GS(Global Standard)科目群』がスタートしています」と、柴田正良副学長(教育担当理事)は語る。

「GS科目群」には、5つの能力に対応した科目が、各6科目計30科目設置された。1つの能力について3科目を選択必修にしている。共通教育を通して、5つの能力がバランスよく養われる形になっているわけだ。

さらに、これまでの共通教育では、教える内容は教員の裁量に任されていたが、教員同士の情報共有と共通認識の醸成に力が入られ、大幅な標準化が図られている。全学生の選択必修だから、同じ科目名でも複数の教員が担当することになるが、共通のテキストを用いて教える。テキストは担当教員が議論を重ねて作成。また、

KUGSの実現を念頭に置いてさまざまな工夫も凝らされている。「5つの能力ごとに、人文科学、社会科学、自然科学の科目をバランスよく配置しています。同じ講義に、文系、理系両方の学生、および外国人留学生が混在することで、発想や考察に広がりが生まれることを期待しています」

さらに、専門教育では「学域GS科目」、大学院でも「大学院GS科目」が設けられ、より発展させた内容で、卒業・修了するまで5つの能力の養成が続く。これらの科目は、「金沢大学ブランド」人材育成のための「基幹教育」と位置づけられており、2016年度、それを担う「国際基幹教育院」も創設された。

人間力を高める「地域『超』体験プログラム」

ただし、こうした座学だけでは5つの能力を開発しきれない面もある。そこで導入されたのが「地域『超』体験プログラム」だ。学類1年生を主対象に、座禅、農作業、民泊先での住民との語らいなどを盛り込んだ合宿が、年4回行われ、学長が主導している。学類を超えた学生同士の出会いの場にもなっている。「KUGSにグローバルという言葉が含まれているのは、当然、グローバル人材の育成を目指しているからです。けれども、高い語学力や、世界情勢に関する知識を身につけただけではグローバル人材とはいえません。他者を尊重しつつ、自分の意見も主張し、共生できる態度や、忍耐力、精神力など、いわば人間力を高める

ことが大切です。労働し、住民と交流する体験は、人間力養成の貴重な場になっています」

海外協定校が倍増し、留学制度がさらに拡充

金沢大学は、2014年度、文部科学省の「スーパーグローバル大学創成支援」事業に採択されている。それを受けて、様々な教育システムの整備が進行中だ。「本学の卒業生は、教員、公務員の比率が高く、法学類では5割を超えています。その多くは地元志向によるものです。また、保護者の多くも地元に残ることを期待している面もあり、強みでもあるのですが、もっと海外に雄飛しようという意欲を持つ学生も増やしたいと考えています。しかも、この2つの志向は必ずしも矛盾するわけではありません。グローバルに活躍する際にも、地域社会の視点を忘れてはいけませんし、逆に地域で仕事をする上でも、グローバルな観点から物事を捉え、問題解決を図る力が不可欠だからです」

学生に海外に目を向けてもらうために、力が注がれているのが留学制度の充実だ。ここ数年で海外協定校は倍増し、200を超えている。留学しやすいように、2016年度からクォーター制も導入された。「在学中に一度は海外で学べる体制を整えます。なぜなら、留学を経験した学生は大きな変貌を遂げるからです。積極的な姿勢が身に



新たな共通教育科目では、少人数クラスでアクティブ・ラーニングを実施。さらに、日本人学生と外国人留学生がともに学んでいる。

		GS科目				
		共通教育新カリキュラムとして、平成28年4月からスタート。すべての学生は、30科目の中から15単位を選択します。GS科目は本学として学生に学ばせたい科目を体系的に厳選したものであり、本学学生として必ず身に付けるべき内容を学修していきます。				
金沢大学ハグローバルスタンダードのカリキュラム	学士課程	1.自己の立ち位置を知る	2.自己を知り、自己を鍛える	3.考え・価値観を表現する	4.世界とつながる	5.未来の課題に取り組む
		【I類】 1.現代社会への歴史的アプローチ 2.グローバル時代の政治経済学 3.グローバル時代の社会学 4.ケーススタディによる応用倫理学	【I類】 1.哲学(自我論) 2.パーソナリティ心理学 3.グローバル時代の文学 【II類】 4.健康科学 5.細胞・分子生物学 6.エクササイズ&スポーツ実技	1.プレゼン・ディベート論(初學者ゼミⅡ) 2.クリティカル・シンキング 3.価値と情動の認知科学 4.論理学から見る世界/数学的発想法 5.芸術と自己表現 6.スポーツ科学	1.金沢・能登と世界の地域文化 2.日本史・日本文化 3.異文化間コミュニケーション 4.異文化体験 5.国際社会とボランティア 6.グローバル社会と地域の課題	【I類】 1.科学技術と科学方法論 2.統計学から未来を見る 3.情報の科学 【II類】 4.環境学とESD 5.生活と社会保障 6.人権・ジェンダー論
		【I類】から1単位、【II類】から1単位を含む3単位以上を履修	【I類】から1単位、【II類】から1単位を含む3単位以上を履修	「プレゼン・ディベート論(初學者ゼミⅡ)」(必修)を含む3単位以上を履修	任意の3単位以上を履修	【I類】から1単位、【II類】から1単位を含む3単位以上を履修
	専門教育	GS言語科目[必修言語科目。英語、または日本語(留学生)。]				
		学域GS科目、学域GS言語科目				
		大学院GS科目				

金沢大学

KANAZAWA UNIVERSITY

つき、多角的な観点から考えようとするのです。そうした学生が“触媒”の役割を果たし、他の学生にも刺激を与えています。海外協定校への半年以上の長期留学や、海外インターンシップのプログラムなども用意していますが、いきなりそれに挑戦するのはハードルが高い面もあります。そこで、1週間から1〜2カ月の海外研修を豊富に設けています。比較的短期の海外研修をきっかけにして、視野を広げ、より本格的な留学にチャレンジしてほしいと考えています」

日本人学生が外国人留学生をサポートする制度も

一方で、外国人留学生の受け入れも活発化している。全学生に占める外国人留学生の割合を、2016年度の5.3%（約560名）から、2023年度に20%（約2200名）に高める構想を打ち出している。キャンパス内に学生・留学生混住型宿舎があり（2012年10月に「先魁（さきがけ）」が完成。2017年度に「先魁Ⅱ」が供用開始予定）、日本人学生と外国人留学生が共同生活を送っている。公用語は英語だ。

日本人学生が外国人留学生をサポートする制度も多彩だ。たとえば、「先魁」に入居している日本人学生は、外国人留学生の生活上のアドバイスや通訳などを行う「レジデントアドバイザー」を務める。図書館には、外国人留学生の学びを先輩学生が支援する「留学生ラーニング・コンシェルジュ」が常駐している。日本人学

生の自主的な応募で、外国人学生の様々なサポートを担う「チューター制度」もある。

キャンパスに居ながらにして、異なる価値観、文化背景に出会える経験は、とても貴重といえる。日常的に外国人学生との活発な交流が展開されており、合同の異文化体験イベントなどもよく開催されている。

学士課程の授業の50%を英語で実施

英語教育の強化も進行している。近い将来、学士課程は全学平均で授業の50%、大学院は原則として全科目を英語で実施することになっているからだ。学士課程をあえて完全英語化しないのは、専門用語を英語でしか理解できないようでは、社会に出たときに通用しないためだ。

2015年度からは、アメリカ・タフツ大学と連携して、「English Language Programs」がスタート。タフツ大学から派遣されたネイティブの語学教育エキスパートが担当している。英語によるディスカッションを軸とした講義や、TOEFL／IELTSなどの試験対策の授業など、多彩な内容のプログラムだ。それによって、卒業時の学生の語学レベルを、TOEIC760点、TOEFL-iBT80点以上を75%以上の学生がクリアするまで上げることが目標だ。英語力に自信がつけば、海外に羽ばたこうという意識も高まることが期待できる。



地域「超」体験プログラムで学生が学長、教員、地域住民とともに薬草の収穫体験。労働しながら、地域住民と交流を深めることで人間力を強化することが狙い。